

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770031

研究課題名(和文) 真理の争いとアーカイヴ：ミシェル・フーコーの歴史研究に関する思想史的考察

研究課題名(英文) Archive as a Battlefield of Truth - The Concept of History in Michel Foucault's Philosophy

研究代表者

箱田 徹 (Hakoda, Tetsu)

京都大学・人文科学研究所・研究員

研究者番号：40570156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：1970年代半ばから後半にかけてミシェル・フーコーが権力を個人や集団間の関係として捉えた議論を展開するにあたり、歴史史料をいかに用いたのかを一次文献を元に考察した。そして法-主権的な権力論の批判という抽象的な議論(戦争概念をめぐる議論)と、個人の生が置かれていた権力関係のありようを明らかにするという具体的な議論(非定型な身体を持つ身体のセクシュアリティにかかわる議論)とがともに歴史史料の読解を通じてなされていること、またそこには真理と主体、権力概念のかかわりが「真理ゲーム」というかたちでクローズアップされていることを示した。

研究成果の概要(英文)：The research project studied how Michel Foucault used historical materials or "archive" to advance his unique relational theory of power. We showed that Foucault criticizes law-sovereignty based theories of power to develop an alternative war-model model of society and that he details how an individual in the past lived her own life in the concrete network of power-knowledge, archive plays a crucial part. We also pointed out the importance of the notion of "truth-game" in these interventions as it not only helps to focus the relationship between truth, subject, and power, but, in so doing, articulates his theory of power to that of government.

研究分野：哲学・倫理学、思想史

キーワード：ミシェル・フーコー ジュディス・バトラー セクシュアリティ 戦争 統治 現代思想

1. 研究開始当初の背景

フーコー研究の現状は、生政治・統治性概念の流行と政治的主体性の問いの浮上として把握できる。この点をめぐり、研究代表者は一連の研究を通じて統治概念の分析を行い「権力から倫理、統治性へ」というフーコー解釈の支配的な流れに批判的に介入した。具体的には、1970年代に登場した統治概念が、1980年代に「自己と他者への統治」と再定義される過程を考察し、統治概念は権力論と主体論の一元的な把握を可能にする

と論じた。ただし統治論をめぐる研究状況には手づまり感もある。後期フーコーの倫理は、既存の権力関係の内部で自己のオルタナティブなあり方を模索する実践の一形態と解釈することとができる。その反面、自己の実践ないし「自己の統治」を個の単独な営みと見なすと、統治のもう一つの極である「他者の統治」とのつながりが弱くなり、統治概念の全体像が見えにくくなる。倫理や自己という語を「個人主義的に」扱う限り、統治論の実際のテーマである、政治や主体性、集合的实践にまつわる問いを深めることは難しい。そこで研究代表者は、フーコー思想と政治的主体性の問いとのかかわりを、フーコーの理論的作業と歴史研究との関係から考察しようと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ミシェル・フーコーの思想について、真理と主体の関係への問い、すなわち「主体化の諸様式の歴史」にまつわる研究という彼の思索全体を貫く関心と、その背後にある政治への問い、具体的には政治的主体性の生成とそのあり方への関心とのつながりを、フーコー自身が注目した歴史資料(アーカイブ)という観点に注目することで明らかにすることにある。

近年のフーコー研究は、統治と生政治に大きく比重を移した。しかし統治論の形成と史料への関心という二つの事柄が、政治的主体性の問いとどうかかわるのかは、双方が共に真理と主体の関係を問題としているにもかかわらず、ほとんど深められていない。そこで本研究では、一次資料の整備が大幅に進んだ現状を活かすとともに、申請者自身の研究の蓄積を発展させる形で、フーコー統治論の理論的含意と政治や主体といった実践的な問いとのかかわりを探ろうというもくろみのもとに構想された。

3. 研究の方法

日本語、フランス語、英語を用いた文献研究を行った。一次文献としてミシェル・フーコー、ジュディス・バトラーによる刊行済テキストを用いた。また二次文献としてはフーコーにかんするものだけでなく、社会哲学、政治哲学一般のほか、2013年度はジェンダー、セクシュアリティ、クィア研究といった

人文学・社会科学はもとより、性分化疾患(DSD)にかんする二次文献については医学分野を含めて可能な限り参照することに努めた。2014年度は近代及び現代における戦争を論じたものや、戦争と文化にかかわる文献も広く収集し、議論の参考にした。

4. 研究成果

(1) ミシェル・フーコー編『エルキュリーヌ・バルバン 別名アレクシーナB』(1979年)にかんする研究

2014年度に刊行した単著『フーコーの闘争』で展開したフーコー統治論の立場から、フーコーの真理概念と史料との関係性を分析した。フーコーの史料への関心は、1970年代終わりには「汚辱に塗れた人々の生」をめぐる主題となることで知られる。行政権力によって自由や生命を奪われたがゆえに、逆説的にその存在が記録され留められた無名の人びとをどう扱うかという問いだ。本研究では、こうしたフーコーの議論を通説のように権力概念とのかかわりで捉えるのではなく、真理概念とのかかわりで捉えた。フーコーは真理による主体化を考えるにあたって、個人は「客観的」真理を介して従属的に主体化するというだけでは不十分であり、個を取り巻くさまざまな真理(ほんとうを述べる言説)とどのようにかかわり合っているかを問うている。本研究ではこの点に注目すべきと考えた。

具体的な素材として選んだのは、Michel Foucault (ed.), *Herculine Barbine dit Alexina B.* (1979)である。この本は19世紀フランスの性分化疾患当事者(当時でいう「半陰陽者」)エルキュリーヌ・バルバンが記し、死後発見された回想録と関連する医学文献・身分関係書類からなる。フーコーはその英語版に寄せた序文「真の性」で「幸福な定かならぬ世界」という表現を用い、バルバンが女性として生きた経験の特徴を捉えようとした。

しかしこの議論をジュディス・バトラーは『ジェンダー・トラブル』で批判する。アイデンティティの「定かならぬ」あり方を肯定的に描くフーコーの態度が『知への意志』での権力の臣従化作用の議論と矛盾すると論じる。つまり、バルバンの回想録とフーコーのテキストの主題は、主体化権力と法への「抵抗」という二項対立や悲劇的な運命論とは別のところに認められる。回想録からは、バルバンが本人なりの身体との付き合い方を通して豊かに生きていたことが読み取れる。このようにバトラーは主張する。

他方でフーコーは、人は「唯一の真の性」を持つと定める近代医学の真理体制におけるバルバンの生を「深慮と分別」という表現で描き出す。あえてすべてを問わずにおくキリスト教的「深慮」と、すべてを解明する科学的真理の「分別」とがせめぎあい、深慮が分別に道を譲りつつある状況のことだ。これ

をフーコーは「真理ゲーム」と呼んでいる。なぜならフーコーにとって「アイデンティティのなさ」とは「誰であるか」を問われることなく、また「あえて」問うこともない逆説的な慎み深さに成立した状態だったからだ。以上の議論から、フーコーは史料を真理と主体との具体的な関係の表れとして扱うことで、元のテキストの読み手に実在の生のあり方を鮮明にイメージさせること、またそれを通じてある歴史状況における権力関係を描き出していることを明らかにした。さらに日本語論文〔雑誌論文〕を改稿した英語論文〔雑誌論文〕では、「法」が同性愛を禁止すると同時に可能にする側面を強調するパトラーの議論に対して、フーコーが同性愛を論じる際に注目した「友愛」の問題系がそうした「法」の定めるセクシュアリティのコードへの批判として作用することをとくに指摘した。

(2) フーコー理論における戦争概念の再評価にかんする研究

2014年度は、昨年度の研究で深めた統治と主体、身体、真理をめぐる論点を軸に、真理と歴史が後期フーコーの著作のなかで果たす役割を「内戦」という観点から論じた。内戦の語は1970年度後半に歴史と真理というフーコーの鍵概念を橋渡しするように表れる。2件の学会発表〔学会発表、 〕と刊行予定の共著書〔図書〕に掲載される論文「ミシェル・フーコーの内戦論—身体と知を架橋する政治的概念としての戦争(仮)」では、フーコーの1975年のコレージュ・ド・フランス講義『社会は防衛しなければならない』の内容を論じながら、この点を前景化させて1970年代半ばのフーコーの思想的展開を明らかにした。

「内戦」あるいは「戦争」は『社会は防衛しなければならない』で全面的に論じられる概念だ。自己と他者のあいだの統治をめぐる争いは、後期フーコーの統治論では真理をめぐる争いとして繰り返し焦点化されている。そうであるならば「戦争」を一般的な意味での軍事的な戦闘行為としてではなく、社会内部における複数の非対称なアクターどうしの争いとして捉えること、またフーコーに引きつけば真理をめぐる統治者と被治者の統治空間内部での争いとして問題化することもできるだろう。付言すれば、1970年代半ばのフーコーはこうした「戦争」を社会関係の比喩ではなく、社会関係そのものだと捉えている。この点は『監獄の誕生』(1975年)の記述にもはっきり見てとれる。フーコーは「戦争」の舞台を物理的な領土だけではなく、身体と知であると考えている。そこで争われるのが「真理」だ。その意味で「戦争」は身体と知を架橋するはたらきをするとともに、フーコー思想を通じて政治を考えるにあたって示唆的な概念装置であると言えるだろう。

法や経済による主権論は「自然化」の論理をはらんでいるとフーコーは考える。法の論理と経済の論理は本来異質なものであるにもかかわらず、両者市民社会あるいは市場をあたかもインターフェイスのようにして結びついている。フーコーが契約説を批判するのは、それがフィクションであるからだけではない。その成立を説くことによって社会の成立そのものが歴史的な形成物であるという点が隠されて、社会契約があたかも必然的なものとして、また無時間的な真理、交換が永遠の現在であるように措定されるからでもある。フーコーは法・主権なものとは異なる社会モデルを構築する足がかりを求めていた。『社会は防衛しなければならない』における「戦争モデル」の議論はそうした経緯の元で登場した。フランス旧体制下の反動貴族ブーランヴィリエから、イギリスの多種多様な反体制派に至る人々のあいだで起きた絶対王政への反対論やネイションにかんする議論は、その洗練の度合いはさまざまであるとしても、支配と従属を「歴史化」する言説として機能する。フーコーはこれらの議論を分析することを通じて、自らの正当性を自己生産する主権の回路に対し、マイナーな知の反乱が絶えず生じることを指摘する。この意味で戦争モデルは、社会を「真理をめぐる内戦」がいつに生じる場として捉えている。

しかしこの年の講義を終えたフーコーは戦争モデルを引っ込めると同時に、関係としての権力という観点を強く押し出す。しかし戦争と権力という2つの語は、統治論における「真理ゲーム」という観点のもとで再び接合する。1970年代後半の段階では「権力・知」という権力と抵抗の枠組みのなかにあったこの観点は、1980年代になると「パレーシア」、つまり「ほんとうのことを言う」の議論で機能する。一見すると真理と権力の問題を個人や集団の生き方という意味での倫理の問題に押し込めるような動きだが、フーコーは次第に真理ゲームの政治的側面を前面に押し出すことで、倫理の問題と政治の問題を同じ一つの土俵で扱うことを試みる。この点を踏まえるならば、真理ゲームという概念を通じて、社会内部の「敵」を相手にする「内戦」の構図が、ミクロなレベルとマクロなレベルでいかに展開しているのかを考えることは、「権力から統治」という図式のもとで後退したかに見える「権力」と「真理」の関係を再び考察する際の鍵になりうる」と指摘した。

(3) 本研究の意義と今後の展望

本研究の意義は、フーコーが権力論を提示し、統治論へと議論を広げる1970年代半ばから後半にかけて、政治、真理、主体という主要な概念群が「歴史」と史料とのかかわりのなかで捉え返されていた点を示したこと、そしてそれがフーコーの権力論・統治論を現代政治哲学のコンテキストで論じる鍵にな

ることを提示した点にある。

フーコー統治論は人文学・社会科学のさまざまな分野で受容されつつある。そこでは統治概念が社会や共同体、国際関係を制御するシステムとして捉えられがちだ。他方で統治概念をめくり、戦争モデルから権力の関係論的なモデルにフーコーの議論は移行したという通説的な解釈も根強い。

だがフーコーの関係的な権力観は、ある一定の空間や領域を具体的な不断の争いが行われる場としていかに捉えることができるのか、という問いかけから始まっている。したがって通説的な理解では、フーコー権力論のスタート地点が曖昧になってしまうのだ。たしかに統治論はシステムと主体をともに語ることはできる。とはいえこの2つは、社会と住民をいかに統治するかという観点から接続されることになる。これではフーコーが「自己の統治と他者の統治」というかたちで問題化しようとした重要な論点の一つ、自己への倫理的なはたらきかけを行う主体が、どのようにして政治的な主体となるのか、という問いかけが完全に論点から外れてしまう。この点について本研究は、統治論のフーコーを通じて、政治と主体をどのように考えるかという問題を、「真理ゲーム」の議論を通じて再び俎上に載せたものであり、後期フーコー解釈のみならず、内外の現代政治哲学で活発に行われている政治と主体、社会変革をめぐる議論への問題提起ともなっている。

本研究は2つの方向に展開する予定だ。1つは2000年代後半以降、現代の経済社会文化状況を捉えるキーワードとして「内戦」が浮上していること、思想史的含意についての考察、もう1つはフーコーが1970年代前半に刑務所・監獄をめぐって行った議論を、最近刊行された関連資料を用いて詳細に検討し、フーコー権力論の生成過程を同時代的な思想的・社会的コンテクストの元で捉え返すことである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

箱田徹「幸福な定かならぬ世界の身体と快楽——『エルキュリーヌ・バルバン』をめぐって、バトラーに抗するフーコー」『生存学』第7号、pp. 214-228、2014年。(査読有)

Tetz HAKODA, "Bodies and Pleasures in the Happy Limbo of a Non-identity: Foucault against Butler on Herculine Barbin," *Zinbun* 45: 91-108, 2015. (査読有)

http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/197515/1/45_91-108.pdf

〔学会発表〕(計2件)

箱田徹「ミシェル・フーコーの内戦論——

歴史 - 政治的主権批判の可能性を探る」日本社会学会、2014年11月22日、神戸大学(兵庫県神戸市)

Tetz HAKODA, "Foucault's

Counter-Theory of Sovereignty,"

Engaging Foucault, 2014年12月5日、ベオグラード大学(セルビア共和国ベオグラード市)

〔図書〕(計1件)

市田良彦、王寺賢太(編)『現代思想と政治：資本主義・精神分析・哲学(仮)』平凡社、2015年、刊行予定

〔その他〕

ホームページ

研究成果を踏まえたウェブページの共同製作と情報発信を、著者が客員研究員を務める立命館大学生存学研究センターのサイト上で行った。

Foucault, Michel ミシェル・フーコー

<http://www.arsvi.com/w/fm05.htm>

性分化疾患(インターセックス)

<http://www.arsvi.com/d/dsd.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

箱田徹(HAKODA Tetsu [Tetz])

京都大学・人文科学研究所・研究員

研究者番号：40570156